

通信小海

白黒二元論者は

危ない

牧師 水草修治



二月に佐久で木村公一牧師にお会いする機会に恵まれた。米国がイラク攻撃を始めようとしていたときに、「人間の盾」として現地入りしていた人である。広い肩幅、長い胴、闊達な話し振り、長い顔にやぎひげ、子どもたちがその胸に喜んで飛び込んでいきそうなお人柄だった。

木村師は冒頭こんな話をされた。「ドイツでナチスが幅を利かせ始めたとき、一人の少年が窓からナチス突撃隊の行進を見て、『お

今月の御言葉

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。」ヨハネ13:13

とうさん。かつこいいね』と言ったとたん、バシッと父親の平手が少年のほほに飛んだのです。

後年、長じたこの少年は振り返って言うのです。『父は寛容で、子どもを怒鳴ったり、手を挙げることもない人でした。しかし、あの時だけは恐ろしかった。今、考えてみれば、寛容な市民社会を守るためには、決して寛容になつてはならない相手がある。それはナチスのような、「おれたちの主張に反する奴らは抹殺することこそ正義だ」という相手に対してであるということをお父は教えたかったのでしょうか。』と。

世の中に黒と白しか存在せず、しかも、自分は純白で、反対者は真っ黒だから、抹殺（ポア）することが正義だと思ひ込むのはカルト思考の特徴である。ところが、今日「テロとの戦い」を標榜する米国の指導者も、反対者はみな抵抗勢力とレッテルを貼って斬って

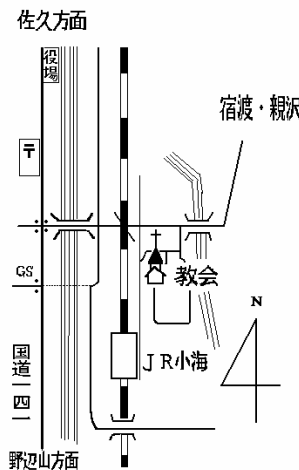
日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三五五 二七

〒三八四一一 二二 二六七九二四七七六

カンパ宛先 振替 005300 61683

見晴台の教会へどうぞ



集会あんない

日曜日 サンデースクール 午前八時四五分

朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日 祈り会 午前十時半と午後七時半

*海尻・川上で毎月家庭集会あり。

*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

という違いである。テロとの戦いを標榜する米国大統領も、日本の首相も、日の丸・君が代に抵抗感を覚える教員たちを処分しつづける都知事も、反対者抹殺主義の白黒二元論者である。沈滞した時代には、善悪二つに割り切ったものを言う単純思考の指導者が、国民の目にはかっこよく映るのである。もっとも米国民は、ようやくこりやダメだと目が覚めてきたようだが。

テロが悪いのは当たり前だが、テロの根本原因は、極度の貧困であり、貧困の原因は先進国にのみ有利な貿易条約や難民を作り出した国際政治の駆け引きである。「もしかしたら、自分も悪かったんじゃないか?」「相手ばかりが黒でなく、自分も黒い所があるのではないか?」と反省することができないなら、平和を作ること、本当の正義も行なうこともできない。これは夫婦でも親子でも職場でも同じことである。

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」**ヨハネ三**

福音指圧教室

春のきざしが、空にも山にも感じられるようになりました。活動を始める



前に、硬くなったからだをほぐしておきましょう。福音指圧教室、気持ちいいですよ。

三月十九日午後2時

持ち物バスタオル、タオル、くつした

海尻井出博彦さんち で家庭集会

毎月第二、第四木曜夜七時半から九時聖書を
読む会をしています。ご一報くださってお越
しください。**96 2534**

南相木でも家庭集会

四月から月一回

関心ある方は牧師にご一報ください。

でんわ 九二 四七七六

古毛布を感謝します

信州から野宿者支援

「ひびき」の購読者を募っています。誌代ならびに送料は無料です。はがきに氏名、送付先と部数を書いて芦谷の事務局に送ってください。
*未使用切手・古毛布募集中

山谷農場事務局（藤田 寛）

答えられた祈り

(作者不詳)

功績を立てようと、神に力を祈り求めたのに、謙虚に服従するようにと弱さを与えられた。

より大きなことをしようと思健康を祈り求めたのに、より良いことをするようにと、病気を与えられた。

幸福になるようにと、富を祈り求めたのに、賢くなるようにと貧しさを与えられた。

人々の賞賛を得ようと権力を祈り求めたのに、神の必要を感じるようにと弱さを与えられた。

人生を楽しもうとあらゆるものを祈り求めたのに、あらゆるものを楽しむようにと人生を与えられた。

祈り求めたものは何一つ与えられなかったのに、実は私が望んでいたすべてのものが与えられた。

このような私にもかかわらず、私に言葉にならない祈りは答えられ、すべての人にまさって、私は最も豊かな幸福を与えられたのだ。

この方は

だれか？



神殿の暗くが上から下に真っ二つに裂けた。イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であった。」と言った。(マルコ福音書十五・三八・三九)

ローマ人は何よりも力を信じた。ローマ帝国は、武力によって地中海世界を手中に収め、皇帝は「神なる皇帝」と呼ばれて君臨していた。武力を背景とした権力こそ、当時のローマ人の誇りであった。帝国は、手に入れた国々を属州とし、それぞれに総督を立て、軍隊を駐屯させて支配し、税を吸い上げて帝都ローマに集めたので、帝都のローマ人は無税で日がな酒池肉林の快楽にふけて暮らした。武力によって集めた富の力がローマ人のもう一つの誇りであった。

ユダヤにローマから派遣された百人隊長がいた。紀元三十年ユダヤ暦二サンの月の過越祭の最中に、彼は風変わりな死刑囚を担

当することになる。総督は、神の子・王だと自称したとなじられるこの男が無罪だと知りながら、暴動を恐れて死刑判決を言い放った。

百人隊長の部下たちはこの間抜けな死刑囚を鞭打ち、こぶしで殴りつけ、つばさえも吐きかけた。男が何の抵抗もしないのを見て「なんと情けない奴だ」と百人隊長は思った。力こそ男の証だと信じてきた隊長として当然の感じ方であった。

しかし、隊長が驚く瞬間が来る。どんな極悪囚も十字架に釘付けにされるときには、泣き喚くか、口汚く罵るのが普通であった。ところが、男の口からもれたことは、祈りだった。「父よ。彼らを赦してください。彼らはなにをしているのか、自分でわからないのです。」耳を疑った。

このあと百人隊長は十字架につけられた男を見つめつけ、一言も聞き漏らすまいと耳を傾けていた。「この男は誰だ？拷問する者にも、侮辱する者にも、愛をもって報いる自由な精神の持ち主はだれか？」と百人隊長は考え続け、冒頭の結論を出したのである。あなたはイエスを誰だと言っただろうか？

